

真砂の慄ている肩の下から、押し殺した声が洩れてくる。

「く！ く！ く！ く！」

やがて真砂、席を切ったように笑い出す。

ギョツとしたようにそれを見下している多襄丸と武弘。

真砂、女のしおらしい仮面をかなぐりすてて、独土器しい形相で喚く。

「ホホホ……たわいないのは、お前たちだ……（武弘に言う）……夫だったらなぜこの男を殺さない……私に死ねという前になぜこの男を殺さないんだこの男を殺した上で私に死ねと言ってこそ男じゃないか……（多襄丸に言う）……おまえも男じゃない……多襄丸と聞いた時、私は、思わず泣くのをやめた……このぐじぐじしたお芝居にはうんざりしていたからだ……多襄丸なら、私のこの助からない立場を片付けてくれるかもしれない……そう思ったんだ……私はこのどにもならぬ立場から私を助けてしてくれるなら、どんな無茶な無法の事でも構わない……そう思っていたんだ……ところが……お前も、私の夫と同じに小俐巧なだけだった。……おぼえておくといい……女は、なにもかも忘れて気狂いみたいになれる男のものなんだ！！……女は、腰の太刀にかけて自分のものにするものだ！！」

「素晴らしい終わると真砂は、ギラギラと燃えるような眼で、そそのかしように二人を見る。

その多襄丸に走り寄って見せる真砂——二、三歩で武弘を振り返る。

武弘も太刀を抜く。

真砂、ゾツとするような笑い声を立てる。

その笑い声の中で、ガツと多襄丸と武弘の太刀が斬り結ぶ。

二人の死闘——それは、多襄丸が話したように英雄的なものではない。

そんな美しさの少しもない醜悪無残なものである。その光景を見ていた真砂、蒼くなって次第に後退りを始め、林の中へ逃げ去る。

多襄丸と武弘の咬み合いは続く。